



Member's Open Space

川柳で綴る遊里史

●美唄歯科医師会会員
雨田 実



慶長八年（1603年）徳川家康が江戸に幕府を開いて後10年余りの間に府内に大名の邸宅・工人商人の店などが建ち並ぶようになり驚く程の繁栄をしていったが、なかでも目立ったのは娼家で、短期間のうちにあたかも江戸城を取り巻くが如くに分散して商売をしていたという。京都・大阪とちがい急激な人口増加の男女比が三分の二以上が男性という男だらけの江戸の街であったことも最大の理由といわれた。娼家の野放しの散在は、犯罪・火災・教育の面からも芳しくないなどの理由から、日本橋葺屋町付近に二町四方（4 ha）の土地に、幕府公許の遊里が許可され元和四年開業した。これが吉原遊廓の初めである。この地は芦の生い茂った沼地のため吉原の名が付けられたという。

“遊女屋が出来ますと芦刈っている” “よしの根は絶えて後には女郎花”などと詠まれたが、またたく間に江戸町・京町・角町など五町ができ、“これはこれほと花の五丁町”と詠まれたりしていたが、とくに大阪落城後の寛永年間頃から江戸の発展と共に吉原の繁栄は大変なもので寛永19年（1641年）のあずま物がたりによると、太夫・75人、格子・31人、はし・881人、家数・125軒とあり、今様をうたい朗詠し扇おっとり一ふししばらく舞いたるを太夫と名づく、といい、それより少し劣ったを格子、さらに下等をはし(端)といっている。太夫のいる家は少なく、はしばかりの家が過半数を数える点はいずれも同じであったようである。

移転命令と新吉原

この日本橋にあった吉原が江戸の発展に従い文字通り江戸の中心市街のうちになってきたため、火災の危険の外に遊廓が目抜き繁華街にあってはとの理由で明暦2年（1657年）移転命令が出された。業者の驚きはひとかたでなく、いろいろ陳情したがとりあげられず浅草観音の裏遠くの人跡まれな所に決まり、敷地も

五割増しにして元吉原で禁じていた夜間の営業も許可した。“日本の果てに傾城ところがえ”と詠まれたが、業者の心配をよそに男ばかり多い江戸の街の有り難さで短期間のうちに元吉原をしのぐ繁栄振りの一大不夜城というべき歓楽境になってさまざまな人間模様を織りなしながら、昭和33年（1958年）4月の売春防止法で消滅するまで300年間存続した。遊里に華開いた江戸文化、人間くさい江戸の息吹を川柳と共に述べる。

“新吉原となっても同じ五丁町”と詠まれたように、元吉原の名前は踏襲された。揚屋町・中之町が出来、横町に格の下の伏見町・堺町の外に小見世が多く並び、お歯黒ドブに面した河岸店も多く、そういう店には最下級の遊女だけで九尺二間にも満たない造りの店ばかりであったという。

“千金の一夜ぐらしは五丁町” “入相の鐘に花咲くひと世界”と詠まれたり。“冷艶全く相並ぶ大籠”これは大見世を詠んだもので、間口十三間（24m）奥行廿二間（40m）を誇り幅七寸（21m）の朱塗りの籠格子が天井まで達している大見世で、太夫のいるような店で大籠と呼ばれた。三浦屋・松葉屋・中米などがあつた。その下に半籠、字の如く間口も半分の店で格も落ちる散茶(振らないでも茶の味、つまり客を振らない遊女)も多く置いた。交じり見世があり、更に横町から奥へと埋茶(さらにうすめた味)級の遊女が多くいたという。更にお歯黒ドブの河岸店にはいずれを見ても山家そだち、スイも甘いもアリンセンの如きがお歯黒ドブにたれながら、そこに寄りなとアゴでいいの如き漫画を彷彿させる最下級のはしたが多くいたという。

ふるわ 廊言葉のこと

“日本からアリンス国は遠からず”。日本とは隅田川の日本堤のことで俗にいう土堤八丁の吉原大門の見返り柳まで通う道筋であった。“北国のなまり どうしい

す こうしいす”。吉原が江戸から北にはなれていたの
で北国とも呼ばれた。“籠の鳥どうしんせうと鳴いてる
る”。廓言葉は遊女たちの国なまりをかくすためのもの。
なんせ・しんす・りんすなど初めとして聞かざる
言葉多し、これもと、京島原詞の名残なるべしといわれ
吉原独特のもので、岡場所のアリンスなどは囃横柄
と詠まれ公認されてない私娼地の岡場所の女達がアリ
ンスを使うのは、ずうずうしいことだったという。公
許遊里の氣位であろう。

吉原遊里には大籠級の本店には高級遊女の見習とも
いう一人前でない、新造や禿やもっぱら介添えの老女
の遣手などがいたのでひと通り述べる。新造は年は16
位で赤色の振袖を着ていたので“新造はみな伊勢武者
の鎧を着”と詠まれたという。どうもよくするとイン
キョの大はまり。この句は廓外では物の役にも立たな
いはずの老人客が新造によって鼓舞されて魂を天涯に
飛ばすというのであるが、さてその方法は、“新造は
入歯はずして見なという”ようにして老いらくの恋も
この里では可能であった。

禿のこと。6歳位から13歳位迄で高級遊女専属の手
許の雑用をした。13になると禿を厨子に入れこれは禿
が遊女の手をはなれ、楼主夫婦の部屋でもっぱら遊芸
の稽古にはげむのである。樋口一葉の「たけくらべ」
の描いた少女はこの引込み禿の少女を描いたもので、
みどりという名前も禿の通称で、その他に禿には、ふ
みの・もみじ・しげみなどの優美な名前がつけられて
いた。一葉女史はみどりを禿としていないが、その境
遇はまさしくそれで数え14になる引込み禿の可憐な初
恋をあのよう美しく書いた名作である。引込み禿の
可憐な初恋をあのよう美しく書いた名作である。引
込み禿が16になって再び遊女の手許に戻って来る時は
新造という名で呼ばれる。禿や新造は高級遊女の候補
者として幼時からきびしい訓練を受けたのであるが、
その他に身売りによって遊女になる素人娘もたくさん
あった。これは18で入廓しそのまま店に出て客をとら
された例で突き出しといった。“つき出しをおじょうさ
まだとだれがいい”これはさる大家が没落して令嬢が
身売りしたのである。それがつき出しとなって早速張
見世に出たので、大家の出入りの者が騒ぎ出したとい
うのである。

遣手のこと。遊女屋の或る程度以上の店には各戸に
一人宛必ずいた女支配人ともいうべき老女である。亭
主も子供もある全く素人で遊女の経験がないから遊女

には少しの同情も持たず、主人に代わって遊女・新造・
禿の訓育に当たり箸の上げ下ろしまできびしく仕付け
たという。“あいわつちや鬼神さなど遣手いい”“禿
なぞひと飲みにする面構”。さすがに鬼の監督と呼ば
れていた訳が分かる。おいらん道中のこと。往時の吉
原は遊女を合宿させている置屋と客が遊女を呼んで遊
興する揚屋とが別にあり、客は揚屋に登楼し置屋から
遊女を招いて遊興するので、遊女が置屋から揚屋まで
足を運ぶのを道中といった。おいらん道中は後年揚屋
がすたれ太夫が居なくなった後も、毎年正月三日の新
年の儀礼として行われた。露 弘の金棒引きが先に立
ち、二人禿・引舟新造・遣手婆などがお供で若い男が
背後から大きな傘を差しかける。遊女は襦袢と称する
豪華な衣裳をまとい、片手を若い男の肩にかけ片手で
高々と襦袢をとり、三本歯の塗下駄をはいた足を八文字
に踏んでしゃなりくなり足を運んだという。今日でも
助六劇の舞台などに見ることが出来る。“二日からも
う書き初めも八文字”とか、下書きを廊下でさせる八
文字の功なつて。“けいせいは傘をさす手はもたぬなり”“遣
手ばば おんなじようにつまを取り”切磋琢磨の功なつ
て太夫職の威光は大したもの、絶世の美人である上
に品位抜群の外学問諸芸に堪能な女性で、大名などを
客としても粗相なく接待出来たスーパーレディであつ
たため、元禄2年の新吉原の総数3千余のうち太夫職
は3名の少数になってしまい、宝暦年間(1752~64)
末には太夫も次の位の格子もいなくなり揚屋も廃止と
なり大衆化の波は吉原にも押し寄せ、江戸四宿(品川・
千住・新宿・板橋)深川芸者など公許でない俗にいう
岡場所に主役の座をうばわれまいとのころみも、小
見世ばかり増え当然端た遊女ばかりのものとなり一層
吉原の品位が低下してしまったという。天保改革後でも
人数だけはものすごく端た遊女ばかりで4千5百を
数えたという。幕末に近く幕府の力も弱体化の一途を
たどったことも公許の遊里だけに時代の流れに付いて
ゆけず遂に往年の繁栄を見ることなく決められた法
の前に姿を消していった。これに反し、四宿・岡場所・
踊り子の類は非合法的なものであるが、姿を変え形を
変えて今日も社会のどこかに残っていて細菌のように
繁殖していて、古典の世界とはいいい難く吉原とはこの
点で事情が違うのである。遊里と川柳を綴るのに、岡
場所その他を略すことは片手落ちではあるが、道楽会
通信の氣品を少しでもそこねてはと思うのでこの辺で
終わりたい。